

西方音楽館友の会会員募集

A 会員 年会費 (4,000 円) 11 名 B 会員 年会費 (10,000 円) 34 名
C 会員 年会費 (15,000 円) 1 名 D 会員 年会費 (20,000 円) 8 名

合計 54 名 539,000 円 (2025 年 6 月 23 日までに会費をご納入いただいた方)
友の会へのご寄付 112,800 円

西方音楽館友の会運営委員: 中新井紀子(西方音楽館館長)、岡田龍之介(チェンバロ奏者)、
小川和隆(ギタリスト)、木下大輔(作曲家)、高田良久(医師、下野楽遊代表)、
中新井諒子(国立音大卒、クラリネット)、永田美穂(音楽学)、山村多恵子(オカリナ奏者)
コンサートは、友の会会費で支えられています。ご支援いただけますと大変ありがたいです。

クラウドファンディングご報告

クラウドファンディングご支援総額264,000円 内手数料などを差し引き友の会への入金は214,632円
ネットを通さないクラウドファンディングに準じること支援総額 241,000円
合計 455,632円
目標額350万円には遥かに達しませんでした、ご支援ありがとうございました。

(一財)西方芸術振興財団

西方音楽館基金へのご寄付 170,000円

スポンサーとしてのご寄付 500,000円

財団へのご寄付合計 670,000円

西方音楽館基金では、毎年ご支援くださるスポンサーを募集しています。詳細はスポンサー募集のチラシをご覧ください。

● 西方音楽館友の会主催コンサート ●

(前号から日程が変更になったコンサートがあります)

●10月25日(土) 15:30 縦と横のファンタジア〜リコーダーとフルートの競演〜
(西方音楽館友の会第140回コンサート)
ジャック＝アントワヌ・ブレッシュ(フラウト・トラヴェルソ&リコーダー)
水内 謙一(リコーダー) 村上 暁美(チェンバロ)

●11月22日(土) 15:30 〜音楽が恋人な二人の秋のコンサート〜
(西方音楽館友の会第125回コンサート2024年10月20日の延期コンサート)
山村 多恵子:オカリナ 岩崎 良子:ピアノ

●12月13日(土) 15:30 《遥かなるブリテンの調べ》イギリス音楽200年〜エリザベス朝から産業革命へ
(西方音楽館友の会第141回コンサート)
古楽アンサンブル「ムジカ・レセルヴァータ」
国枝 俊太郎:リコーダー、フラウト・トラヴェルソ 小野 萬里:バロック・ヴァイオリン
高橋 弘治:バロック・チェロ ヴィオラ・ダ・ガンバ 岡田 龍之介:チェンバロ

●12月28日(日) 15:30 ベートーヴェン ヴァイオリンソナタ全曲演奏会シリーズ第3回〜川口成彦を迎えて〜
(西方音楽館友の会第142回コンサート)
廣海 史帆:ヴァイオリン 川口 成彦:ワルターモデル・フォルテピアノ

2026年

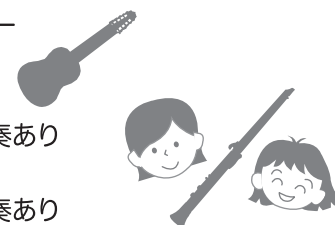
●1月25日(日) 15:30 J.S.バッハ ヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会No.2〜
ヴァイオリン・ソナタ&鍵盤独奏曲の饗宴〜
(西方音楽館友の会第143回コンサート)
碓 美穂子:ヴァイオリン 武久 源造:ジルバーマンピアノ

●2月8日(日) 15:30 想いが歌になる時・・・
〜歌とギターによるコンサート〜 (西方音楽館友の会第144回コンサート)
大塚 道子:メゾ・ソプラノ 小川 和隆:ギター

親子のための音楽会

2025年8月10日(日)クラリネットの演奏あり
10月13日(祝・月)

2026年1月11日(日)クラリネットの演奏あり



こ・ぼ・れ・話

本質を見極めるのは難しい。
案外、苦境に陥った時、
見えてくるものかもしれない。

中新井紀子



2025. 7.

木洩れ陽の窓から No. 33

西方音楽館友の会会報

編集・発行人 中新井紀子

西方音楽館

322-0601

322-0601 栃木県栃木市西方町金崎342-1 TEL 0282-92-2815 Web <http://wmusic.jp>

本質を見極める、ということ 〜往年の名歌手、古澤淑子を巡って〜

中新井紀子

30年ほど前、2軒北隣の古澤家からいただいた本「夢のあとで フランス歌曲の珠玉 古澤淑子伝」を、久しぶりに読み返した。

旧例幣使街道金崎宿(現栃木市西方町金崎)かつての本陣、古澤家。古澤淑子の父親、栃木市の先人として山本有三らと並び名を連ねている古澤丈作が生まれ育った場所。

私の結婚式では、この古澤家の方にウェディングドレスを縫っていただき、それ以来、親しくお付き合いいただいている。その当初から、古澤家の雰囲気、気高さのようなものに、私は惹かれていた。

本を読み返すうち、どうしても古澤淑子の歌を聴きたくなり、ネット検索したところ、かつて都内にあった古澤淑子のスタジオでライブ録音したテープから制作された CD「古沢淑子ふたたび〜フランス近代歌曲集〜」(2019年作)の存在を知り、即購入し、聴いてみて驚いた。

凛とした美しさ、気高さ。それでいて繊細で表情豊か。辛口ながら芳醇な香りと深い味わいのワインのような。

古澤淑子は 1916年(大正 5年) 満州・大連で生まれ、1930年東京へ、1937年パリへ留学。1940年〜1945年、戦時中のフランス、ドイツ、スイスで壮絶な逃避行を経験している。1944年パリで、戦後ジュネーブでのリサイタルは、大好評で、新聞でも絶賛される。1952年帰国し東京に住む。1958年ドビュッシー:ベレアスとメリザンドの日本初演(メリザンド役)を成功させる。この時の指揮者ジャン・フルネは、メリザンド役にふさわしい長所をすべて備えており、感受性が非常に豊かで、詩的センスと優美さにあふれる芸術家、と絶賛している。サティ、セヴラックなどの歌曲もいち早く日本に紹介する。桐朋学園大学や東京芸術大学、フランス歌曲研究会などで、後進の指導、及びコンサートを開催。1975年フランス サヴォア・エヴィールへ移るに当たり、音楽家としては引退。2001年死去。

ドビュッシーの薫陶を受けたマダム・クロワザに、フランスで徹底的に教え込まれたことは、「言葉は正しく発音されて初めて意味を伝える。正しくは、深く吸い、送った息を声帯にピタッと当て、そこで言葉が正しく発音されればよい。」しかしこれは、大変なトレーニングであった、と。そして詩句のひとつひとつの綴り、その音のありよう、その意味、その表情、強弱を見極め、心情を託すなどというものではなく、あらゆる知識と理解と感受性を総動員したうえで到達できるかどうか、という審美的探究を促された。

芸大生の時から古澤淑子のファンであった指揮者 若杉弘によれば、古澤淑子は 1950〜 70年代に「フランス音楽の背骨」を日本にもたらしてくれた。そして、この背骨があることによってのみ香り立つものを残してくれた、とのこと。

音楽評論家 遠山一行は、古澤淑子が日本と音楽を‘捨てた’その年齢に達してみると、いま音楽が置かれている状況は極めて悪い。・・・見せかけの音楽の繁栄の裏で大切なものが失われている、と。

古澤淑子は、文化的環境においても、経済的にも、大変恵まれて育ったが、それを最大限に活かすことが出来たのは、類まれな感性と、本質を見極める姿勢と、背筋に1本筋金が入った真摯な生き方故と思われる。

経済優先の現代にあって、時代に逆行する姿勢ではあるが、西方音楽館も音楽の本質を見極め、それを伝える場となっていきたい。

(「夢のあとで フランス歌曲の珠玉 古澤淑子伝」 星谷とよみ著 文園社、
CD「古澤淑子ふたたび」 ソプラノ: 古澤淑子 ピアノ: 井上二葉 NAMI RECORDS WWCC-7905)